『日本語はどこから生まれたか』まえがき（ベスト新書 86）

ドイツ語、ロシア語、フランス語、英語、イラン語、ヒンディ語といった現代印欧語に対し、これらの直接の先祖であるゴート語、古スラヴ語、古代ギリシャ語、ラテン語、ペルシャ語、サンスクリット語など、正体のはっきりわかっている古印欧語と呼ばれる言語がある。この古印欧語はその先にあったと思われる一大言語から枝分かれしたと考えられている。この大言語「印欧祖語」の姿は、古印欧語の共通点を通じてある程度推測してみることが可能だ。印欧語比較言語学は中間の古印欧語がしっかり存在したことで成り立っている。

こうした研究は日本語ではむずかしい。というのは日本語では、古印欧語にあたる紀元前の言語が明らかではないからだ。日本語と共通の起源をもち、現在も残る言語としてはっきりしているのは日本語より文字使用の遅い琉球語しかない。さらに日本語自体、漢字で表記され始めた時期は早くはないので古い姿はなかなかわからないのである。本書で推定しようとしているのは、語彙単位の比較によるものではなく、できるかぎり古い日本語（これを日本語とは呼べないにしても）の構造と、他言語の構造との関わり方である。

日本語と朝鮮語は同系統と考えている外国の言語学者は多い。「韓日両語が同系の言語であることは動かされない厳然たる事実」と考える韓国の金公七（キム・コンチル）は、韓日の分岐が紀元一世紀から三世紀になされたと推定している（「韓国語と日本語との同系論」『日本語の起源』馬渕和夫編）。朝鮮語学者、河野六郎先生はかつて、「（朝鮮は近くて遠いところとよくいわれるが）朝鮮の言語も日本語とは近くて遠い言語である」（『朝鮮語大辞典』角川書店）と言った。文法構造は酷似しながら、その構造の枠をうめる音形が似ても似つかないものであるからだという。たしかに日本語の開音節（母音終わり）構造に対し朝鮮語には閉音節（子音終わり）もあり、子音の清濁の対立がある日本語に対し朝鮮語にはそれがない。母音構造も日本語とは大きく異なる。実際、列島語と半島語の分岐は、金公七の考える時期よりかなり前というのが私の感じだが、韓日両語になっていく言語を生み出したその大言語は後世の朝鮮語でも日本語でもありえないことは確かだ。

日本語は成立過程で大陸と長い交通があり、アイヌ語とも古くから相互交流がある。少なくとも弥生時代以来、朝鮮半島の言葉とはとくに深く関わっているだろう。印欧語前の言語とされるドラヴィダ語の系統をひくタミル語が日本列島に直接伝来し、日本語の基になったとは私にはまったく思えないが、遠い昔、日本語になるべき言語と大陸内部でつながっていたことは十分ありうる。

意味を表す語と文法機能しか表さない語との並列的連結からなる膠着（こうちゃく）語としての日本語と、人称、数、格といった基準で語が構造的に対応し合う屈折・照応言語としての印欧語とはまったく違う言語と考えられてきた。しかし印欧語をさかのぼると、こうした文法枠は必ずしも大きな差異の基準ではなく、印欧語を他言語から決定的にへだて特立させるものではない。また現代人の遺伝子の共通性は、現代のヒトの間に越えられない言語の壁が生まれる理由のないことを示している。我々は世界の言語の多様さに驚嘆すると同時に、相似の濃さ、深さにも驚くのである。こうした観点から見ると、数万年前アフリカからアジアに展開したヒトの言語のいくつかの分枝から、東では中国語や古朝鮮語、古日本語、アイヌ語が、西ではヒッタイト語や古ヘブライ語、トルコ語、バスク語が生じたとしてもおかしくない。

「水」を表すラテン語アクアとアイヌ語ワッカ、「犬」を表すギリシャ語キュオーン（属格キュノス）、ラテン語カニスと中国語チュアン、あるいは日本語イヌ（ケン）といった断片的語彙の比較、文法の表層的分析を積み重ねるだけではそれぞれの言語のつながりはなかなかわからない。日本語の起源の難問をすこしでも風通しよくするために、今までの伝統的な枠を一度飛び越え、新しい共通の言語の地平を自分で開拓してみたいと思うのである。(2005 年 5 月)

工藤　進（kudo_susumu@mac.com）